

戦後七十年 平和への祈り

松永地域在住の方からの戦争体験ききとり冊子

平成二十七年八月

内容

1. 硫黄島^{いおうとう}の激戦^{げきせん}で玉砕^{ぎよくさい} 父^{ちち}に残した遺書^{ゆいごん}
2. 終戦^{しゅうせん}2日前、嵐^{あらし}のために長らえた命
3. 満州^{まんしゅう}から母に宛てた手紙
シベリア抑留^{よくりゅう}で帰らぬ人に
4. 戦後3年目にしてシベリア抑留から還^{かえ}ってきた父
5. 福山大空襲^{ぜんしゅう}で家が全焼^{ます}・貧しくともたくましく生きていけた戦後の少女時代
6. 「遊びで戦場に行ったものは誰もいない」
7. 原爆の悲惨な状況の中「生きたい」と思った
『福山市原爆死没者慰霊碑建立記念誌 原爆被爆体験記』より転載
8. 八月六日の誕生日プレゼント
田丸公美子著『シモネッタのどこまでいっても男と女』（講談社刊）より転載

～大人の方へお願い～

このききとり冊子は、小学校高学年のお子さんが読んでも分かるような内容を心がけています。難しい漢字にはルビをふっています。

この冊子には、地元の一般の方がどのように戦争に関わっていたのか、貴重な体験が納められています。小さいお子さんには大人の方がどうぞ読んであげてください。そして、平和や戦争について考え、語り合っていいただければ幸いです。

旧松永市(現福山市)地域



広島県地図・広島県HPより引用

はじめに

8月6日の原爆投下、それに続く8月8日の福山大空襲、そして8月15日の終戦記念日。そういうこともあってか、8月のお盆勤めでは檀家さんから戦争に関する思い出話を伺うことが多々ありました。戦時中、タンスの着物と農作物を交換していたので、無用の長物となった今でも「恩人」であるタンスを捨てられないでいること。夜、福山大空襲で赤々と燃えている空を布団の中から見ていた少年時代のこと——。教科書には載っていない、一般の方の体験や思いがあることに驚きを感じると共に、そういった体験や苦労を次の世代に伝えていかなければならないと常々思っていました、きちんと形にすることなく月日が経っていました。

今年の春、53年間にわたって原爆の絵を描きつづけてきた画家小川憲一さんの絵に出会いました。焼けただれた女性や子供、ごみ同然の廃墟となった焼け野原・・・それらは絶望的かつ衝撃的でじっと見つめることはできませんでした。そんな中、おそらくもう亡くなっていると思われる子供を優しいまなざしで見つめている女性の絵の前で自然と足が止まりました。悲惨な状況の中でも、なおもあふれ出る母性。それは絶望の中の希望。

そのやさしい母のまなざしに促されるように、戦争体験のききとりを行う決心をしました。この試みが正しいものであるかどうか分かりません。その方の心の傷を掘り起こすこともあるからです。実際ききとりをして、70年経った今でも、悲しみや苦しみは決して色あせることはないことが手に取るように分かりました。とはいえ、戦争という極限状態の中でも、人間としての尊さや思いやりもあったのだということを知ることができました。

ききとり対象者は松永地域在住の蓮華寺檀信徒の方々であり、平成27年5月～6月にご自宅もしくは蓮華寺にて浦山慈水が行いました。快く対応して下さいったことに対して改めて感謝の意を表します。また、当初インタビュー形式でそのまま掲載するつもりでしたが、歴史的背景無しでは内容が伝わりにくいと判断し、つたないながらも解説を加えました。誤りなどある場合、ご指摘いただければと存じます。

改めて、この冊子が戦争について考えるきっかけとなり、平和への礎となることを望みます。先の戦争でつらい体験をした方々、もっと生きたかった方々の魂がやすらかであることを心から祈って。

合掌

平成27年7月大暑

蓮華寺副住職 浦山慈水

い お う と う げ き せん ぎ ゃ く さい ち ち ゆ い ご ん
硫黄島の激戦で玉砕 父に残した遺言

や の た く え
矢野卓衛さん

1919 大正 8 年 7 月 23 日 生まれ 広島県沼隈郡今津町出身

(当時、今津町は福山市ではなく沼隈郡でした)

1941 昭和 16 年 22 歳 東京高等師範学校(現在の筑波大学)卒業

香川県高松第一中学教諭として働き始める

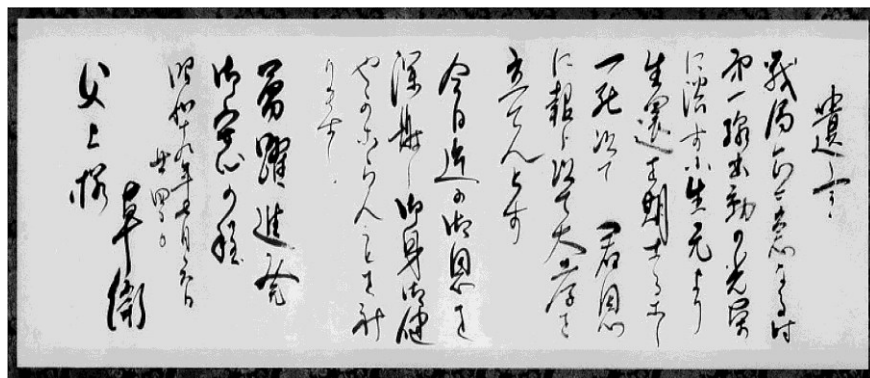
その後まもなく西部二部隊(広島県)に入隊

1944 昭和 19 年 25 歳 中尉として硫黄島へ派兵される。

7 月 遺言を親元へ送る

1945 昭和 20 年 26 歳 3 月 17 日 硫黄島の激戦で玉砕 享年 27 歳

矢野卓衛さんは硫黄島(次ページに地図あり)で戦死する半年前、次のような遺言を父親である寛治郎さんに送っています。下の遺言は卓衛さんの直筆です。



「遺言 戦場はまさに急場を
迎えています
そういう時に第一線に出動で
きるといふ光栄にあずかりま
した
私は元々生きて帰ることは期
待していません
私の死をもって、君主である
天皇のご恩にお返しをし
また、家族に対する大いなる
孝行を果たす決心をしていま
す
今日まで私を育ててくださっ
たご恩に対して深く感謝し
お父様のお体が健やかである
ことを祈っています
勇ましく躍り出るべくいざ出
陣
どうぞご安心ください
二十四時 卓衛
父上様」
(現代語訳浦山)

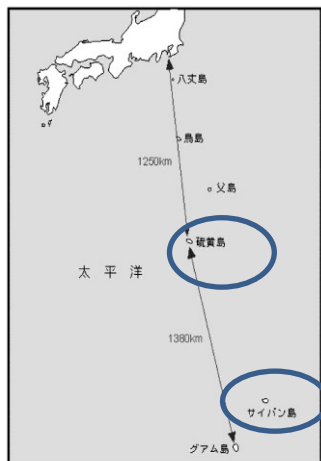
【玉砕】玉が美しく砕けるように、名誉や忠義(主君や国家にまごころを尽くしてつかえること)を重んじて、いさぎよく死ぬこと。『広辞苑』

「玉砕」という言葉を小学生や中学生の皆さんは知っているでしょうか？もしかしたら、ゲームで敵にこっぱみじんにやられることを「玉砕」といい

るかもしれませんね。現代の日本では信じられないことかもしれませんが、戦争当時「天皇のため、お国のために命を捧げること」＝「玉砕」は讃えられることでした。そして、捕虜(戦争で敵に捕らえられること)として命を長らえることは「恥」であり、むしろ「自決(自殺)」した方がいさぎよいという時代だったのです。それをどう判断するかはここではさしひかえますが、日本軍の「玉砕」に関して参考になると思われる小説の一部を紹介します。

「日本兵は死を怖れず戦い、捕虜になっても自決する、しかし、アメリカ兵は、ベストを尽くして任務を遂行し、駄目な時は捕虜になっても恥じない、むしろ捕虜になるまで戦ったことを名誉に思う、同じ人間なのに、日本人は死を怖れず、アメリカ人は死を怖れる、どうしてこのように違うのですか」
簡単にこたえるには、至難な質問であった。天羽賢治は暫し考え、
「アメリカ人は生命の尊さを第一義として考えるが、日本人は生死を超えたところに人間本来の生き方があるという考えが、古くから人々の心の中に培われている、それが武士道となり、軍隊の精神になっている、したがって、君たちも太平洋戦線に出た時は、日本軍は最後の兵卒になるまで戦い、玉砕する軍隊であることを認識した上で、行動することだ(後略)」

山崎豊子著『二つの祖国』(新潮社)より



<http://volcano.instr.yamaguchi-u.ac.jp/iwojima.html> より引用

矢野卓衛さんは今津町の染物屋さんの長男として生を受けました。性格は穏やかでまじめな青年だったそうです。成績も優秀で、学校の先生になるため東京師範学校(東京)に入学しました。当時卓衛さんと下宿先が同じだった男性が、後に遺族の方に送った手紙の中で「非常にやさしい方で兄弟のように接してくださいました」と卓衛さんの人柄をしのんでいたそうです。

晴れて師範学校を卒業したのち、香川県高松第一中学校で学校の先生として働き始めます。しかし、その年に戦争が始まり、卓衛さんはまもなく広島市にある西部二部隊に入隊します。軍隊に入りどのような生活を送っていたのか、ご遺族の方も定かでは

ありません。

卓衛さんが大学を卒業してまもなく始まった太平洋戦争は、2年も経つと日本が明らかに劣勢になってきました。サイパンの日本軍は1944(昭和19)年アメリカ軍によって全滅し、アメリカ軍は日本との戦いにおいて優位に立つようになりました。さらにアメリカ軍は、日本本土への上陸およびB29による空襲攻撃の

足がかりとして、硫黄島に目を付けました。(ビル・D・ロス著『硫黄島 勝者なき死闘』読売新聞社参照)

東西8キロ、南北4キロの比較的小さな島で、日米合わせて約8万人が激突し、総勢約3万人の兵士が亡くなった、後に「硫黄島の激戦」とよばれる戦いで卓衛さんは亡くなりました。(ちなみに、尾道市向島は硫黄島とほぼ同等の大きさです)。1945(昭和20)年2月10日に米兵が硫黄島に上陸し、日米軍の戦いが開始。3月26日に終結するまでの約一か月半の間に、日本兵22,000人のうち1033人以外全員戦死、もしくは自決。対するアメリカ兵も61,000人のうち6891人は戦死、21,865人は負傷するというまさに死闘が繰り広げられました。



卓衛さんがどのような最後を迎えたのか、硫黄島の戦闘員がほとんど亡くなった現状の下、父・寛治郎さんは知るすべがありませんでした。唯一の息子を戦争で失い、どれほど悲しんだことでしょう。寛治郎さんは染物屋を営む一方、梅哉という俳号で俳句を詠んでいました。蓮華寺の庭には、俳人としての功績をたたえ、父親が息子の戦死を悲しんでいる様子を詠った寛治郎さんの句碑が建てられています。(写真)

「老僧になぐさめられし 墓参かな 梅哉」

寛治郎さんは卓衛さんが戦死して7年たった昭和27年、卓衛さんが亡くなった同じ3月に享年67歳で生涯を閉じました。

卓衛さんの死を悲しんだのは寛治郎さんだけではありませんでした。実は、卓衛さんは硫黄島に出征する一か月前に結婚していました。卓衛さんは、この戦争で生きて帰ることは難しいことを察して、死を覚悟の上、奥さんに実家に帰って再婚するようにと言いました。卓衛さんの戦死が判明した後、奥さんは遺言通り結婚を解消して実家に戻りました。

それから何十年か経ったのち、卓衛さんのお墓に参るため、遺族の方の元に卓衛さんの奥さんだった女性が現れました。

「私はあれから縁ある方と再婚し子供も授かりました。主人も亡くなり、卓衛さんのお墓にお参りすることができませんでした。卓衛さんは本当にやさしくまじめな方で、私は尊敬しておりました。忘れることは出来ません。」

お墓参りの後、卓衛さんの遺族の方と思い出話を語り合い、その女性は卓衛さんの遺品^{いひん}をかかえて東京まで帰っていかれました。

たった一か月の結婚生活とはいえ、卓衛さんのことを胸に秘めながら、彼女はどのように日々の生活を送っていたのでしょうか。今ではもう知るすべはありません。



矢野卓衛さんの部隊に所属していた方の息子さんが、戦後、何度か硫黄島を訪れ、矢野小隊が最後を迎えた場所を探し当て、供養を捧げられました。(写真)。

卓衛さんのご遺族も、1998(平成 10)年 2 月、日米硫黄島戦没者合同慰霊顕彰式^{せんぼつしゃこうどういれいけんしょうしき}のため硫黄島を訪れました。硫黄島では 18 キロメートルにもおよぶ地下壕^{ちかごう}がはりめぐらされ、主にそこが日本軍の軍事拠点^{きぎょてん}となっていました。

実際、地下壕に入ってみてみると、地熱の暑さでじっとしていただけませんでした。卓衛さんはそんなひどい環境の中で戦っていたのかと思うといたたまれない気持ちになりました。

と、遺族の方は語られました。

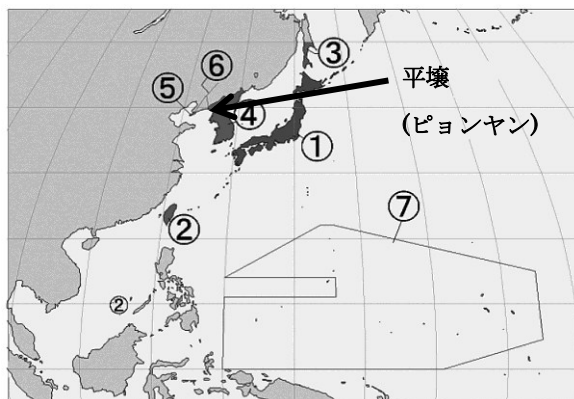
終戦2日前、嵐のために長らえた命

卓衛さんのように遺書を残して激戦の中亡くなった人もいる一方、遺書まで書いて死をも覚悟していたけれど、様々な要因で生き延びた人もいます。神村町で長年開業医をしていた小林眞藏さんはその1人です。

眞藏さんは去年平成26年に亡くなくなりましたが、奥さん(佳津子さん)と息子さん(修之さん)からの聞き取りと、眞藏さんが亡くなる一年前に、福山市本郷町のお寺・東藏坊さんがビデオで記録していた戦時インタビュー内で眞藏さんが発言した内容をもとに作成しました。

小林眞藏さん

1923	大正12年8月	広島県沼隈郡神村町に生まれる
1936	昭和11年 13歳	誠之館中学校入学
1941	昭和16年 18歳	平壤(ピョンヤン)医学専門学校入学
1945	昭和20年 22歳	海軍に志願し、戸塚海軍軍医学校に入学
8月15日横須賀の海軍基地で終戦を迎える		
1960	昭和35年 37歳	岡山大学医学部博士号取得
2014	平成26年10月7日	享年92歳



1920年代の日本の領土。

- ①日本 ②台湾
- ③樺太、千島列島
- ④大韓帝国(朝鮮半島)
- ⑤関東州
- ⑥南満州鉄道
- ⑦南洋諸島

Wikipedia,『新日本史 B』
(山川出版)参照

北朝鮮の首都であるピョンヤンに、日本の医学校があったと聞いたら驚かれる方もいるかもしれません。戦争当時、朝鮮半島は日本の一部でした(地図参照)。父方のおじさんが医学校の教授をしていた関係で、眞藏さんは18歳で平壤医学専門学校に入学します。その半年後に太平洋戦争が始まりますが、よく隣の畑からお芋をいただいていたそうで、のどかな学生生活を送っていたそうです。

20歳の時眞藏さんは徴兵検査を受けます。当時日本では、満20歳の男子は全員徴兵検査を受けることになっていて、甲種・第一乙種・第二乙種・丙種・戊種

に分類されました。(『十五年戦争』文芸社参照)。「甲種合格」を喜んだ、お兄さんである小林隆士さんの言葉が残っているので紹介します。

眞藏から一昨日ハガキが来ました。彼は甲種合格との話。之で家からも久しぶりに兵隊が出る事が出来ました。何はともあれお目出度い事です。

1943(昭和 18)年 11 月 13 日消印の葉書

この葉書から、当時軍人になることは名誉あることだったことが伝わってきます。実は眞藏さんのお兄さんは満州で銀行員として働いていましたが、その後現地で召集され、帰らぬ人となりました。

さて、兵役検査を受けたからすぐ軍に入ったという訳ではなく、眞藏さんが実際入隊したのは終戦の年、22 歳の時でした。以下は前述のビデオ内で眞藏さんが語った、海軍医学校での様子です。

海軍に憧れて

私は志願して横浜市にある戸塚衛生学校の軍医学校に入りました。海軍は恰好いいイメージがあり、憧れていたのです。

入学したしょっぱなの日に空襲がありました。東京めがけて B29 が上空を飛んでいました。敷地内の防空壕にすぐ避難するよう指示がありましたが、「戸塚は田舎だからどうせ爆弾は落ちないだろう」と思い、飛行機が爆弾を落としている様子を防空壕の入り口付近から見ていました。中には駐車場にいて煙草を吸っていた学生もいました。これはさすがに見つかって上官からお仕置きを受けていました。

「眼鏡をかけている奴はすぐはずせ！股を開け、下腹に力をいれろ！」と上官が叫び、次々にビンタをくらわせていました。私は殴られたことはありませんでしたが、学生が体罰を受けることは日常茶飯事でした。

訓練は厳しいもので、食事後の 15 分の休憩以外はずっと走っていました。靴の先が割れて開くとひもで縛っていました。軍人勅諭*を暗記させられたり、軍艦演習をしたりと休む暇はありません。しかしこれでかなり鍛えられました。今ではよい思い出です。

【軍人勅諭】明治天皇が軍隊に与えた言葉。軍隊統率の大元は天皇であることを明らかにしたあと、忠節、礼儀、武勇、信義、質素の 5 つの基本徳目を示している。第 2 次世界大戦が終わるまで軍の精神的支柱となっていた。『ブリタニカ百科事典』参照

厳しい訓練生活の中にも人情が

当時、何かについて生徒に体操ばかりさせる先生がいました。体操をする姿がまるでタコのようにぐにゃぐにゃした動きだったので、私はひそかに「タコ踊り」と命名し、日記に書いて憂さ晴らしをしていました。

ある日その先生に突然呼び出され「そこに座れ。お前、私の悪口を日記に書いていただろう！」と言われました。訓練中に机の中にしまっている日記を見られていたのです。私は飛び上がり、すぐさま「すみません！」と土下座しました。殴られることを覚悟していましたが、「まあビールを飲め」と許してくれ、そのあとは一時間ぐらい色んな話をしました。上官にはかわいがってもらいました。

横須賀空襲

(1945 昭和 20 年の)5 月か 6 月だったと思います。横須賀の海軍基地には軍艦が一隻残っていました。それを襲撃するためになんと 250 機の B29 がやってきたのです。当時人気のあった有名な兵曹長が私の目の前で弾にあたり亡くなりました。頭を爆弾が通り抜け脳が破裂したり、背中から砲弾を受け内臓が飛び出てくる様子も目の当たりにしました。この空襲で 48 名が亡くなりました。基地内の防空壕はとても頑丈で、私はそこに避難していました。

眞藏さんは天皇による降伏宣言（玉音放送）2 日前に特攻部隊として人間魚雷に乗り込む予定でした。人間魚雷とは、海軍が作り出した水中特攻兵器。魚雷に 1 人が乗り組み、敵艦に体当たりします。それは当然死を意味します。遺書もすでに書き終えていました。

ぼう然として迎えた終戦

すでに日本の軍艦は壊滅状態。海軍から出撃できるのは「人間魚雷」だけでした。いわゆる特攻部隊としてそれに乗り込んで、アメリカの軍艦に体当たりする予定でした。怖いという感覚はありません。死ぬのが当たり前でしたから。

8 月 13 日の夜に出発するはずだったのが、夕方から大雨の嵐がやってきて横須賀の基地で待機しなければならませんでした。完全武装をした状態で、防空壕から外に出られない状態でした。

次の日、嵐も収まりいよいよ出発かという矢先に、お昼頃「明日、重要な発表があるので待機するように」という放送が流れました。天気の良いのにどうして出陣しないのだろうか、と私たちは不思議に思いましたが、やることもなく「これが最後のシャバだ」ということで、保管庫にある食べ物を取り出して、めいめい好きなものを食べていました。

8月15日。一同は呼び出され、整列しました。玉音放送（天皇による降伏宣言。「耐えがたきを耐え、忍びがたきを忍び」という一節は有名）が流れたのち、役員が何かしゃべっています。何のことかさっぱりわかりません。しばらくして、嵐の前に特攻部隊として出ていた同僚が基地に帰ってきました。目を赤くし、ただならぬ様子だったので彼に尋ねました。

「どうしたんだ？何があったんだ？」

「日本は負けた」

「何でだ？何でお前がそんなことを知っているんだ？」

「さっきの玉音放送は終戦の宣言だったんだ」

私はとっさに「たすかったー」と命が長らえたと思うと同時に、疲れが一気に出ました。

いったん帰還したその同僚は突然、特殊潜航艇（魚雷を発射できる小型潜水艇）に乗り込みました。周りは必死で止めましたが、他にも27隻が海軍の港から出ていきました。半分はアメリカの軍艦に東京湾で沈められ、半分は基地に戻ってきました。

アメリカ軍の命令により横須賀の基地でしばらく過ごした後、眞藏さんは故郷の神村町に帰ります。大きい行李（今でいうスーツケース）二つを座席から離れた場所に置いていたところ、それら二つとも盗まれてしまいました。その中には軍事訓練中のくわしい日記や特攻前に書いた遺書も入っており、眞藏さんは晩年までそれらを失ったことを残念がっていたそうです。自ら憧れて入った海軍、歯をくいしばって耐えた軍事訓練、目の前で亡くなった上司や仲間たち、それらを一つ一つ振り返り、それらの意味を確かめる「寄る辺」を失ってしまった喪失感は計り知れないものだったのでしょう。ただ、幸いにも、眞藏さんには海軍医学校時代の仲間が残っていました。毎年全国各地で同窓会が開かれ、眞藏さんはそれを何よりの楽しみにしていたそうです。

葬儀を自宅で行うこと、祭壇には白い花を飾ること等、眞藏さんは自らの死を迎えるにあたりいくつかの遺言を残しました。出征する時に神村町の人たちが縫ってくれた千人針を棺に入れることもその一つでした。

【千人針】第二次世界大戦までさかんに行われた、多くの女性が一枚の布に糸をぬいつけて結び目を作る、戦場での幸運の祈りをこめたお守りのようなもの。できあがった千人針を、兵士は銃弾よけのお守りとして腹に巻いたり、帽子にぬいつけたりした。『Wikipedia』参照

まんしゅう
満州から母に宛てた手紙
よくりゅう
シベリア抑留で帰らぬ人に

こばやし たかし
小林隆士さん

1917 大正 6 年 沼隈郡神村町生まれ

年代は不詳だが、満州国にいる母方のおじの縁で満州興業銀行に入行

1941 昭和 16 年 24 歳 母親宛ての手紙 3 通。太平洋戦争始まる。

1943～1945 の間に満州で召集される

1945 昭和 20 年 28 歳 8 月 8 日 ソビエト(ソ連)・モンゴル軍が満州国に侵攻
8 月 15 日 日本降伏宣言

その後ソビエト・モンゴル軍に連行され、「シベリア抑留*」にて死亡

1946 昭和 21 年 2 月 享年 30 歳

【シベリア抑留】第二次大戦の敗北により満州・北朝鮮・千島列島の日本軍人・満蒙開拓団農民・満州国関係職員などがソビエト軍に抑留されて各地で強制労働に従事したこと。ソ連軍による武装解除後、シベリアを中心とする各地の収容所に送られ、鉄道建設、炭鉱、道路工事、農作業などの労働をさせられた。待遇は過酷なもので、抑留者約 57 万～70 万人のうち約一割が死亡したと推定される。『日本史広辞典』山川出版社参照

小林隆士さんは前述の眞藏さんのお兄さんです。満州国で銀行員として働いていましたが、現地で召集され、終戦間際に攻め入ってきたソビエト（ソビエト連邦は 1991 年になくなり、ロシア国となる）・モンゴル軍にシベリア地方へつれて行かれました。そして、戦争が終わって一年後。

「昭和二十一年二月亡 享年三十歳」

家族にはシベリア地方にて病気で亡くなったとの知らせがあっただけで、遺骨が戻ることはありませんでした。



満州から母に
宛てた手紙

私がお嫁に来てからも、義母さんは隆士さんが亡くなったことをよく嘆いていました。

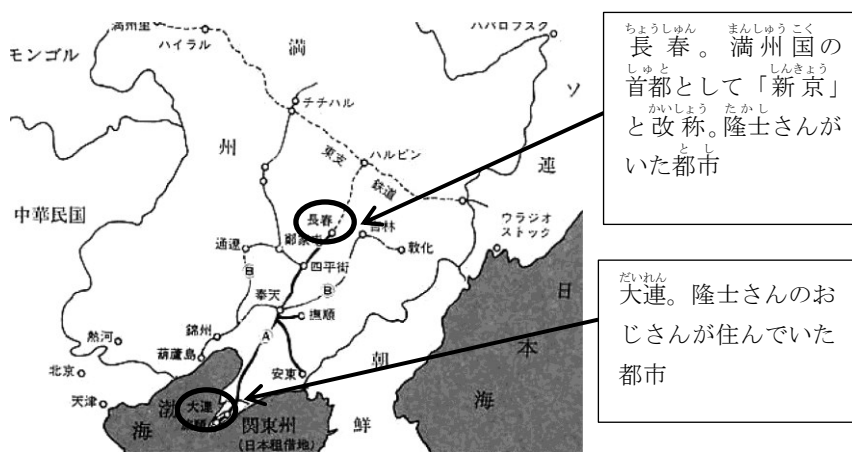
と佳津子さん（眞藏さんの奥さん）は振り返ります。

今回の聞き取りで、隆士さんが母親に宛てた 3 通の手紙と 1 枚の葉書を見せていただきました。佳津子さんは隆士さんを直接知っている訳ではありませんが、義母・美津子さんが大切に取っていた手紙を処分する気持ちにはなれず、そのまま保管していたのです。

眞藏さんが「おじさんのように」慕^{した}っていたという、6歳年上の隆士^{ひとがら}さんの人柄と、当時の満州国の様子を手紙を通してお伝えしたいと思います。

隆士さんのことを紹介する前に、「満州国」について説明する必要がありますでしょう。「満州国」は現在、主に中国の領土となっていますが、1932年から1945年まで存在した「国」だったのです。当時、台湾^{たいわん}と朝鮮半島が日本の一部であったのに対して、後に満州国となる地域は日本の領土という訳ではありませんでした。その当時すでに消滅^{しょうめつ}していた中国の清朝から最後の皇帝^{こっかげんしゅ}を国家元首^{こっかえいしゅ}として迎え、様々な民族が暮らすその地域を「満州国」と名付け、独立国の体裁を整えましたが、国際的に認められず、その後日本は世界から孤立^{こりつ}していきます。とはいうものの、日本から莫大^{ばくだい}な投資が行われ、満州国は発展^{はつしん}していきました。

隆士さんは大連^{だいれん}にいる母方のおじさんの縁で、満州の首都・新京にある満州興業銀行に入ります。当時満州で働くことは珍しいことではありませんでした。「満州国」という別の国ではありましたが、広島県からであれば、九州や北海道に行くような感覚だったそうです。



満州国の地図 <http://www.history.gr.jp/~showa/112.html> 参照

【康徳8年6月18日消印（昭和16年 1941年）】

※「康徳」満州帝国の元号で1934年を元年とする。1945年まで続いた。『日本史広辞典』山川出版参照

お手紙拝見致しました。家では皆んな元気で何よりです。小生も至極^{しごくじょうぶ}丈夫ですから他事御安心^{ごあんしん}下さい。

藤江^{ふじえ}(現在の福山市藤江町)の新ちゃんはどうとう亡くなったそうですね。やっと希望通りにゆきかけたのに残念でした。周囲の方々もさぞ落胆^{らくたん}なさっているでしょうがこれも運命ですね。

小生も棺桶に片足つつこみましたがやっぱり運があったのですね。まだまだうんと仕事をせねば死なれませんよ。

今年入ってきた行員も身体をこわす人が多いですね。誰かが寝たり休んだりしていますが御蔭で小生は相変わらず元気で通勤しています。

隆士さんのお父さんは学校の先生をしていました。教育界と銀行の実業界ではいろいろと環境や価値観も違うのでしょうか。隆士さんの心の内がつづられています。

お父さんももう出勤なさっている事と思いますが、（私が）初めて実業界へ立つと（お父さんが）今まで考えていた事と大いに相違していますのでいろいろ失望される事もあるでしょうが、人間も精神的にどこか動物の保護色のような働きをするものがあるものですね。いつの間にか周囲の環境によって気づかぬ間に（私の）気持ちも変わっていくものですね。

当新京もすっかり夏らしくなりました。朝は四時半頃から太陽が昇り夜は九時過ぎまで明るい始末です。日中は二十九度以上に昇る事もあり内地の七月中旬ごろの気候ですね。

それから例の建国大学ですが、これは満洲国最高の学府で他の大学は民生部即ち内地の内務省の監督をうけるのですが（文部省に相当するものではありません）この大学は國務院直属の機関で総長は國務総理。副総長は特任官で作田莊氏元京都帝大の総長です。将来大満洲帝国を背負って立つべき人材の養成を目的としており学生にはロシア人、満人もまじっています。他の大学は角帽ですが、ここは丸帽で、洋服もカーキ色の労働服みたいなのを着ています。とにかく将来性は大きいと思います。

しかしどちらかといえはまだまだ現在の所、内地の大学の方が頑張っていますね。

九月に試験があるのでしたら受験してみるのも一案かと思います。

満洲国は様々な民族を受け入れる政策を取り入れており、大学が国際色豊かであったことが分かります。弟の眞藏さんに進学先の一つとして満洲の大学を勧めているのでしょうか。

パナバ帽(パナマ帽のことか。パナマ草を原料にした白い夏帽子。戦前は紳士用の正装として愛用されたそうです)は当分必要ありませんから虫に食われない様にして取っておいて下さい。今度内地へ帰るのはボーナスを貰った今頃(来年の6月のことか?)になると思われるのでその時着て帰りますから。

当地では花瓶とか時計など非常に高く閉口しているのですが、もし送れるようでしたら例の支那焼きの赤い花瓶と置時計を送って戴きたいのですが。もし送れない様でしたら又荒木君が帰った時にその由申しますからことづけ下さい。多分今年の終わり頃になると思います。
では今日はこれにて。

【康德8年6月23日消印】

内地はもう田植え時で忙しい事でしょう。今年は水も充分にあるとか。白い米も食べられますね。小生芋は三、四年前の関東軍の押下ですからボリボリしてうまく、為に寮でも一四五人腹下しをしていますが幸い小生は元気ですから御安心下さい。

大連の繁叔父さんはまだやって来ませんが近々の内に来ると思います。どうせ来るなら給料を貰った時に来て欲しいものですね。そうすれば少なくとも軍人会館の洋食か国都飯店の支那料理位は御馳走出来るでしょうから。

今日は一つ景気の良い話を聞かせましょうか。先づ現在鼎銀が入っている所は大鼎公司という質屋の親玉のビルディングですが（満洲国は建国前までは銀行が紙幣の発行と質屋とを兼業していたのです。それが満洲国が出来てからは紙幣の発行は中央銀行、質屋の方は大鼎公司（資本金二千万円の質屋です）がその業務を引き継ぐことになったのです）この借代金は月に五万円、年六十万円です。又鼎銀の総裁を一期三年間やれば三十万円の金が残るそうです。

先づ総裁の年俸は五万円です。それにボーナスが半期三万円、年六万円ですから結局年十一万円の収入。それに加えて三年後には退職金は十五万円ですから。実際上の方があまり取りすぎていますね。
では今日はこれにて失礼します。

「景気の良い話」について考えてみます。経済に明るい著者の知人に問い合わせると、そもそも当時の貨幣価値を現在のそれに正確に換算することは難しいことらしいのですが、換算を試みてもらいました。

日銀が発表する企業物価指数を参考にすると、1931～1945年の平均で、当時の100円は52万円程度に相当。

つまり、鼎銀総裁の年俸5万は2億6千万円、退職金15万円は7億8千円に、3年間で30万円という報酬は15億6千万円に相当します。

たしかに隆士さんが「景気の良い話」といっているのもうなずけます。

ちなみに平成の世では日本銀行総裁の年俸は2278万円(日本経済新聞2014,6月付)だそうです。3年間勤務した場合でも年俸の合計は1億円にも達しません。

話が逸れました。太平洋戦争が始まる年の7月には、満州で70万の兵士による大規模な軍事演習が行われ日本軍の士気が高められる一方、アメリカやイギリスを中心に日本に対する経済的な締め出しが行われるようになり、ついに8月アメリカが日本に対して石油の輸出を禁止します。このように日本はますます世界から孤立していき、隆士さんの手紙から満州ののんびりした雰囲気も一転している様子が伝わってきます。

【康德8年7月21日消印】

小生相変わらずピンッとしてゐますから御安心下さい。

(おそらく同僚たちが兵士として招集されて、年配の人間ばかりが職場に残っているということでしょうか)

どうも親玉ばかり居るのでは行きにくいですね。町に時々つれて行ってくれて、おごってくれますがやっぱり男は気がきかんですよ。

独ソ(ドイツとソビエト連邦)開戦と共に日本の外交にも一大刷新を加へるべく近衛内閣も総辞職をして新に出直す事になりましたね。

新京も急に緊張してきました。在郷軍人*分会銀班にも足止が来ましたし、ぞくぞく召集されて入隊してゐます。

【在郷軍人】平時は民間にあって生業につき、戦時に際しては、必要に応じて召集され国防に任ずべき軍人。『広辞苑』

見返りは一切厳禁、奉公袋*もトランクの中に入れて平常服で入営する事になってゐます。或いは当地も爆弾の一つ位は見舞われるかも知れません。

一回位は弾の下をくぐって見るのも良い経験だと考えてゐます。では今日はこれにて、元気でゐますから御安心下さい。



【奉公袋】奉公袋は、陸軍において入営及び戦地に赴くとき、必需品を入れていった袋で軍隊手牒、勲章、記章、適任証書、軍隊における特業教育に関する証書、召集及び点呼令状、その他貯金通帳など応召準備、応召のために必要と認めるものを収容するように袋の裏側に記されている。またこのほかに遺髪、爪袋、遺言書封入などが収められたという。そして在郷軍人は

この袋を常に準備していつでも召集により戦争に行けるよう、意識を高めていたのであった <http://www13.ocn.ne.jp/~seiroku/houkouf.html> 参照

この手紙が書かれて後、隆士さんは満州で召集され、日本が降伏する一週間前に攻め入ってきたソビエト・モンゴル軍によってシベリア地方に連れていかれます。冬にはマイナス 30 度にもなる極寒の地で隆士さんは亡くなりました。どのような労働をしていたのか、どんな暮らしをしていたのか、何が原因でどこで亡くなったのか、家族には全く知らされませんでした。遺骨も故郷に戻ってきませんでした。

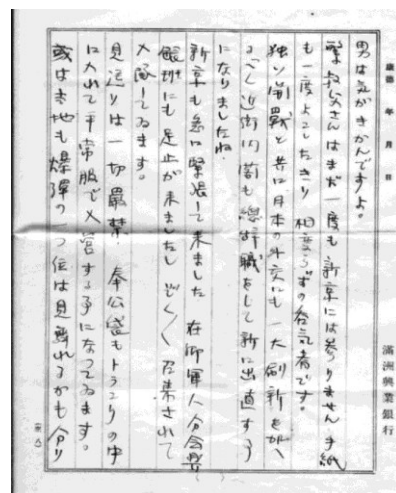
戦争が終わった翌年の 1946(昭和 21)年、ソビエトと日本の取り決めにより、シベリア地方に連れ去られた人々は順々に日本に^{もと}戻り始め、1950(昭和 25)年 4 月までにほぼ完了しました。ソビエト抑留によって連れ去られた人の数は 57 万~70 万人で、1 割にあたる 5 万~7 万人が現地で亡くなっていると言われています。たとえ死亡の知らせがあったとしても、私が美津子さんの立場であれば、引きあげてくる集団の中にわが息子がいるのではないかと、わずかな^{のぞ}望みをかけていたかもしれません。

隆士さんのお墓が建てられたのは佳津子さんがお嫁に来て間もなくのことでした。

小林家の先祖祭を^{せんぞさい もよお}催した年に、義理の母・美津子を中心となって隆士さんのお墓を建てました。たしか昭和 25 年頃だったと記憶しています。

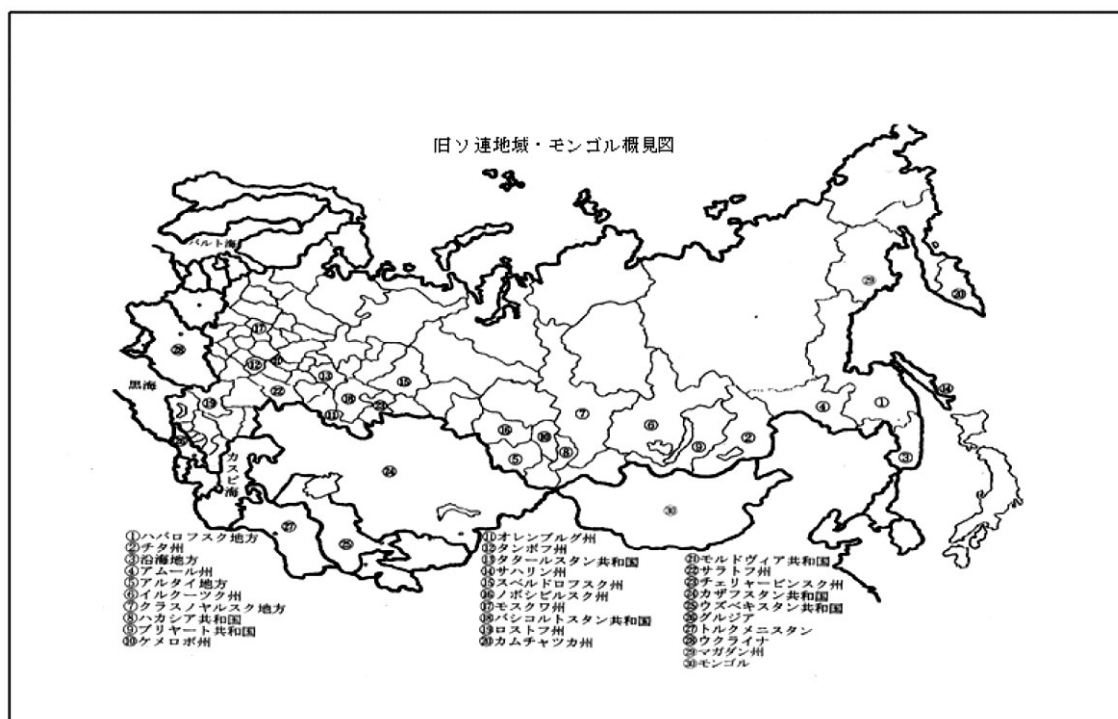
と、佳津子さんは振り返ります。

隆士さんのお墓がたてられたのは死亡の知らせから数年ほど経っています。それは母美津子さんが隆士さんの死を受け入れるまでにかかった時間なのかもしれません。その墓所は、隆士さんがご両親と共に安らかに眠る場所であると信じてやみません。



隆士さんの直筆
まめに母親に手紙を書いていたそうです

日本政府が発表している、シベリア抑留中の日本人収容所は以下の地図のとおりです。想像以上に、広い範囲に及んでいることに驚き、言葉を失います。



(注) 丸数字は、ロシア政府等から提供された抑留中死亡者名簿に、収容所・埋葬地の記載がある地域です。

厚生労働省 政策レポート 「シベリア抑留中死亡者に関する資料の調査について」 <http://www.mhlw.go.jp/seisaku/2009/11/01.html> より引用

戦後3年目にしてシベリア抑留^{よくりゆう}から還^{かえ}ってきた父

池藤幸市^{いけふじこういち}さん

- 1910 明治43年 福山市木之庄^{きのしょうちやう}町に生まれる
1931 昭和6年21歳 満州^{まんしゅう}事変^{じへん}おこる
時期は定かではないが、日中戦争(支那事変)に出兵
1940 昭和15年30歳 長女喜代子^{きよこ}さん生まれる
1941 昭和16年31歳 太平洋戦争はじまる
1942 昭和18年32歳 次女日出子^{ひでこ}さん生まれる
1945 昭和20年35歳 召集により満州へ出兵
8月8日 ソビエト・モンゴル軍が満州に攻める
8月15日 日本降伏^{こうふくせんげん}宣言
強制労働のため、両軍により「シベリア抑留」される
1948 昭和23年38歳 8月 神村町の家族の元へ帰ってくる
2010 平成22年5月 享年101歳

池藤幸市さんは「シベリア抑留」から生きて帰ることができた1人でした。幸市さんは終戦の年に召集されて満州国にいました。日本が正式に降伏する1週間ほど前、ソビエト・モンゴル軍が満州へ攻めてきて、日本軍の兵士や満州で働いていた一般人を連れ去り、極寒のシベリア地方で鉄道建設や農作業の労働力として使ったのです。

後に幸市さんは当時のことを娘さんたちにこう語っていたそうです。

ロシア人は信用できない。「お前たちを解放してやるからついてこい」といって信じてついていったけれど、いっこうにそれらしい所に着かない。それどころかだんだん寒い場所に向かっていた。そして、毎日働かされた。

くしゃみをするとう鼻水も凍るような寒さだった。地べたに置くと靴が凍るから、寝るときは靴をベッドに置いて寝ていた。

幸市さんが家族の元へ帰ってきたのは、戦争が終わってから3年後のことです。つまり冬にはマイナス20～30度にもなるような土地で丸三年間ひどい環境で働き続けさせられていたということになります。幸一さんがシベリア抑留から戻ってきたとき、娘の喜代子さんは7歳、日出子さんは5歳でした。

たしか、昭和23年の8月だったと記憶します。母から突然「父が帰ってくるからむかえに行こう」と言われ、私たちは福山駅に迎えにいきました。真夏だというのに冬服の上に冬のコートを着ていました。おそらく持っていた唯一の服だったのでしょう。当時だれにでも頭にシラミがわいていましたが、父親の

頭はことのほかシラミだらけでした。



(左)○で囲んでいるのが幸市さん。満州は冬にはマイナス 30 度ほどになるので防寒服を着用。抑留から帰ってきたときはこの写真と同じ格好だったのでしょうか。
(右)写真の裏面。それぞれの名前が記入。亡くなった人には(故)と記されています。

幸市さんが満州へ出征した時、日出子さんはまだ 2 歳で、父親の顔を覚えていませんでした。初めて会う人のように、幸市さんを見ると、日出子さんはお母さんの後ろに隠れたといいます。

「幸市さんが帰ってこない 3 年間、お父さんがいなくてさびしい気持ちはありませんでしたか？」という問いを喜代子さんと日出子さんにしたところ

もしかしたら大人たちは子供のいないところで父のことを話題にしていたかもしれませんが、お父さんのことはだれも話題にしませんでした。戦争でお父さんを亡くした子供はめずらしくありませんでしたし、親戚の人に囲まれて生活していたのでさびしいとかあまり感じませんでした。そして、何よりみんな生きていくだけで精いっぱいでした。

幸市さんの奥さんであるタカエさんは当時どのような心境だったのでしょうか。幸市さんの死を覚悟して、女手一つで子供を育てなければならないという覚悟の思いで過ごしていたのでしょうか。

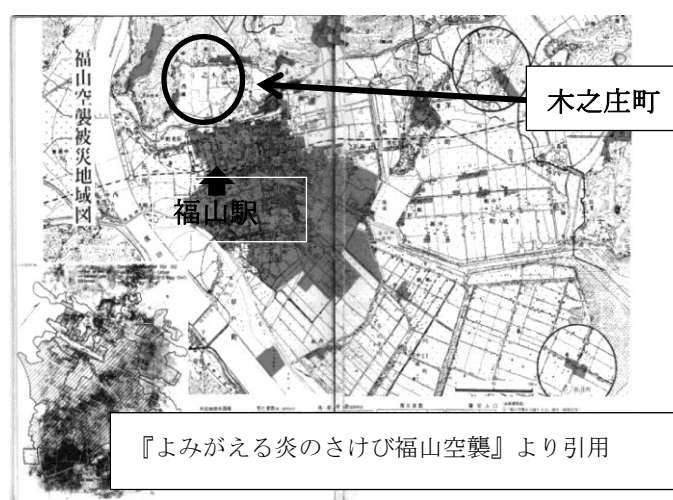
ところで、幸市さんが出征してから家に帰るまでの間、タカエさんと喜代子さん・日出子さん母子はタカエさんの生家^{せいけ}に身を寄せていました。元々は幸市さんの出身地である福山市木之庄町近くに家族で住んでいましたが、約 10 キロ離れた沼隈郡神村町^{かむらちょう}に移り住んだのです。

お母さんの実家は神村町の松本^{まつもと}という地域にあり、畑作^{はたさく}や稲作^{いなさく}もしていて食べ物にはあまりこまることはありませんでした。家の縁^{えん}の下にはにわとりが飼われていました。実家の周辺には親戚が住んでいて、幼い喜代子さんと日出子

さんはよく親戚の人から食べ物をもらったといいます。

モノが不足している戦争中でも親戚や近所の人からいろんな食べ物をもらい、かわいがってもらいました。地域の人々のつながりは強かったです。モノはなくても人間関係は豊かな時代だったと思います。

戦争中とはいえ、大人に守られながら比較的小さな日々を過ごすことができていた姉妹でしたが、生死を分かたず大きな出来事が起きました。福山空襲です。



昭和 20 年 8 月 8 日、夜 10 時 25 分、福山市上空に 91 機の B29 機がやってきて 1 時間にわたって焼夷弾を落とし、市街地の 80 パーセントの土地が焼き尽くされ、348 名が亡くなりました(『よみがえる炎のさけび 福山空襲』参照)。終戦一週間前のことです。偶然にも幸市さんのいる満州国がソビエトとモンゴルに攻められた日と同じ日です。

その日、タカエさんと妹の日出子さんは配給の食品を受け取るため、家のある福山市街地に一時的に帰っていました。

神村に残っていた喜代子さんは空襲警報を受け親戚たちと一緒に防空壕にかくれていました。福山中心街から神村までは約 11 キロありますが、夜空が明るくなっているのが見えたそうです。

防空壕の中から空襲をみると、福山の空が一面赤色になっていたのを今でも覚えています。「花火みたいにきれい!」と叫んだら、周りの大人に「そんなこと言うものじゃない」とたしなめられました。中心地に戻っていた母と妹は空襲にまきこまれて亡くなっているにちがいないと親戚の人たちはあきらめてい

たようです。

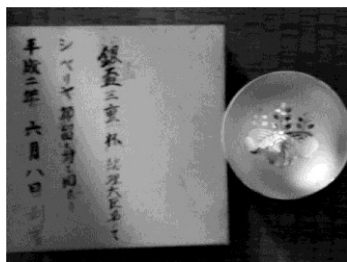
翌日か翌々日、タカエさんは日出子さんを背中におぶって、木之庄町から神村へ歩いて帰ってきました。空襲があった時、木之庄町の親戚の家の中で避難していたそうです。空襲の混乱こんらんをくぐりぬけ、顔をすすだらけにして、母は子供を背負おい神村町に帰ってきました。

私は空襲のときは2歳で記憶がないのですが、神村の実家にたどり着いた時、食べものもなくひもじかったからでしょう、背中に負おわられていた私は母の胸をまさぐっていたそうです。

今回、幸市さんが残した戦争中の写真などを見せていただきました。写真の裏には幸市さんの手書きで、写真の人物たちの名前や撮影した場所や時が記されていました。「いつも仕事から帰ると高く抱き上げてくれ」「ほとんど子供を叱しかることはなかった」子煩悩でやさしい人柄の幸市さんは、家族を残して出兵し、戦争が終わってからも極寒のシベリアの地で3年間、いつ終わるとも知れぬ労働を強いられました。

父は生前戦争についてあまり語ることはありませんでしたが、自身が集めていた戦争に関する資料はすべて棺ひつぎにいれるようにと遺言にありました。

生前、戦争について語ることの少なかった幸市さんが、棺に戦争の思い出の品を入れたということは、どういう意味が込められていたのでしょうか。



平成2年、シベリア抑留者に対して政府より贈られた「銀盃」(幸市さん所有)。幸市さんはどのような思いでその銀盃を眺めたのでしょうか。

福山大空襲で家が全焼

貧しくともたくましく生きていけた戦後の少女時代

E・Yさん（福山市今津町在住）

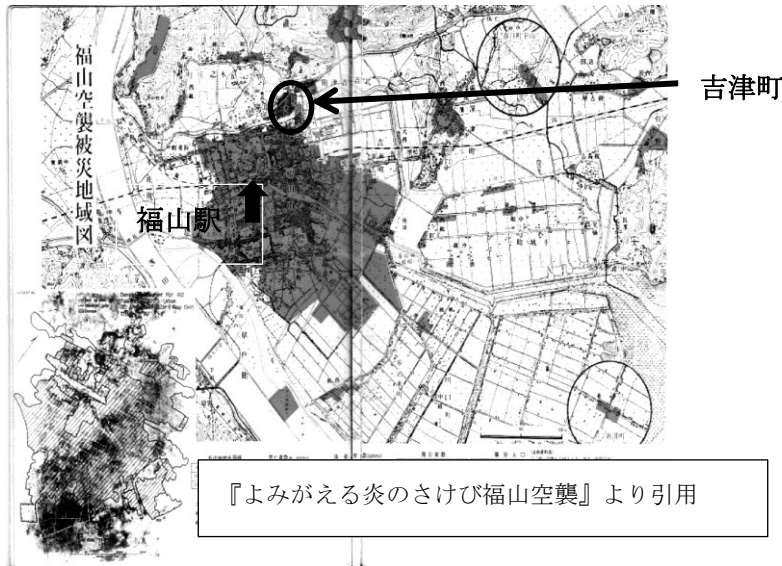
1937 昭和 12 年 1 月 11 日 福山市吉津町よしづちょうに生まれる

1941 昭和 16 年 4 歳 太平洋戦争始まる

1945 昭和 20 年 8 歳 芦名郡府中町あしなぐんふちゅうちょう（現・広島県府中市）へ疎開そかい

8 月 8 日 福山大空襲

E・Yさんの生家は福山駅の北側にあり、福山大空襲で家が全焼しました。



太平洋戦争の最中さいちゆう、私は小学校低学年でまだ幼かったからでしょうか、天皇のために死ぬとか敵であるアメリカ兵はひどい奴らだとか、そういう考えはあまり根付いていませんでした。高学年は教育勅語*を毎日そらんじていたので、戦争に対する心構えや緊張感きんちやうかんは私たちとは違っていたと思います。

【教育勅語】1890 年(明治 23)に発布以後、第二次大戦後の教育改革まで日本の教育理念の指針ししんとされた勅語ちよくご(天皇のことば)。「忠君愛国ちゅうくんあいこく(君主に恩義おんぎをつくし、国を愛すること)」「忠孝一致ちゅうこういっし(君主に対する忠義と親に対する孝行を一致させること)」を教育の基本として強調し、天皇は単なる政治的主権者であるばかりでなく、国民の道徳的・思想的中心どうとくてき しそうてきちゅうしんとされた。『詳説 日本史研究』山川出版 参照

1945 年 3 月から 6 月までアメリカ軍の B29 機によって東京、名古屋、大阪といった大都市が徹底的に空襲された後、中小都市の空襲が開始されました。あらかじめ、180 の都市がリストアップされ、終戦までに原爆を投下された広島と長崎を除く 66 の都市が焼き払われました。(岡山市発行『岡山空襲の記憶』参照)

福山も軍需工場や陸軍施設があったことから、空襲警報もたびたび鳴り、そのつど市民は防空壕に避難していました。

戦争中は授業をちゃんと受けるどころではありませんでした。授業中に空襲警報が鳴ったら六年生が手を引いて裏門から家に連れて帰ってくれていました。警報が解除されたらまた学校に戻るという日々でした。

いよいよ全国各地で空爆がはげしくなり、Eさんはきょうだいとおばあさんと共に、知り合いの家の離れを借りて、芦名郡府中町で疎開生活を始めます。

戦争中は食べ物が不足していて、お百姓さんと物々交換をしていました。着物や帯も野菜や米と交換していました。母の実家が瀬の浦にあり、親戚が魚を持ってきてくれたら、それも農作物と交換しました。お金よりも食べ物が貴重な時代でした。幼ごころに「白いご飯とすきやきが食べられたら死んでもいい」と思ったものでした。

8月8日、福山大空襲が起きる日、私はおばあさん達と一緒に荷物を取りに吉津町の家に帰っていました。幸いにも日中、府中に戻っていたので何事もありませんでした。吉津町の家に残っていた両親は、空襲の間、家の前の橋の下に逃げていると助かったと、かなり後になって聞きました。

当時、福山市の面積は約 41 km²。現在の約 12 分の 1。空襲によって市街地の約 80 パーセントが焼け、234 名(別の資料では 275 名)が亡くなりました。(『福山市史 福山空襲の記録』参照)

家は全焼し、借家が焼けずに残っていたので家族でそこに住んでいました。食べ物もなく貧しかったです。苦しいとは思いませんでした。友達と遊ぶときは針と糸を持って、イナゴ(バッタ科の昆虫)をつかまえ数珠つなぎにしておやつにしました。戦後しばらくの間、ご飯といえば麦飯。おかずもかぼちゃや芋ばかり。麦とかぼちゃと芋は今でも見るのもいやで、一生分食べたと思います。

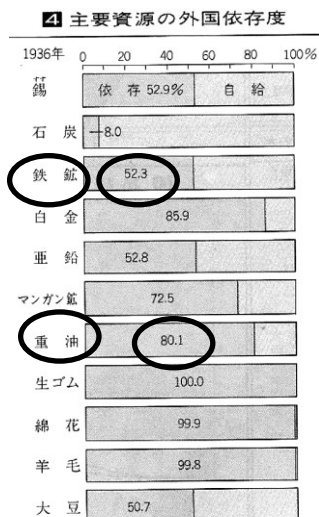
近隣の小学校の校舎は焼けてしまったので、しばらくは学区をまとめて合同校舎で授業が行われていました。臨時の校舎は清潔とはいえず、夏はしらみで頭がかゆく、校舎はすきまだらけで、冬はしもやけで手足がかゆかったです。授業は算数と国語より社会科が中心で、グループ学習に重点が置かれていました。よく郊外に調べものにみんなで行っていました。貧しかったです。苦しいとは思いませんでした。しんぼうして自力でがんばるという気持ちが養われたと思います。

「遊びで戦場に行ったものは誰もいない」

実際に軍人として戦争にたずさわった今年 89 歳になる方のききとりを紹介したいと思います。村上直人さんは自宅から蓮華寺まで約 5 キロある道のりを今でも自転車で来られるくらいご健在です。時々戦争の思い出を村上さんから聞いてはいたのですが、今回のききとりで、改めて戦場へ赴くことがどんなに厳しいものであったのか、そしてそのつらい思い出は 70 年経った今でも鮮明に残っているのだということが分かりました。

村上直人さん（福山市金江町在住）
 1926 大正 15 年 8 月生れ 沼隈郡金江村出身
 1941 昭和 16 年 16 歳 金江青年学校入学
 12 月 8 日 真珠湾攻撃を機に太平洋戦争開始
 1943 昭和 18 年 18 歳 青年学校卒業
 藤江で軍用船を作る仕事に就く
 1944 昭和 19 年 19 歳 徴兵検査後、呉の海兵団所属
 期間は定かではないが、水島海軍航空隊に入る
 1945 昭和 20 年 20 歳 8 月 15 日終戦
 しばらく呉で連合軍に収容された後、故郷の金江村に帰る

16 歳の時太平洋戦争が始まりました。日本がアメリカの真珠湾を奇襲攻撃したことが原因でした。当時日本はほとんどの鋼鉄や石油はアメリカから輸入していたので「『だんな』であるアメリカと戦争するのは間違っている」という声もありました。実際、軍艦などの軍用機は鉄で出来ていて、石油を燃料として動いているのですから。



『日本史総合図録』（山川出版）によると(左図)、1936 年の主要資源の「外国依存度」は「石炭」が「8%」であるのに対して、「鉄鉱」は「52%」・「重油」は「80%」でした。

近所の人たちが「働くなら海軍がいいぞ」としきりに言っていたのを小さいころから聞いていたので、16 歳で高等科を卒業した後は海軍に志願しようと思っていました。しかし「死ににいくようなものだ」と親に反対されたので金江にある青年学校(実業補習学校と青年訓練所を統合してできた青少年教育機関)に進学しました。金江の青年学校は三年制で、現在の金江小学校に併

設されていました。主に金江、山南、藤江から700名ほどの生徒が通い、戦争中であっても通常の勉強をしたり、時には戦争の奉仕活動をしていました。

満州に渡って帰ってこなかった同級生たち

尋常小学校を卒業後、高等科や青年学校に進学できた私は恵まれていたと思います。小学校の時、満州に渡り義勇軍*に入ることを先生がしきりに生徒達に勧めていました。当時満州国は開拓中であり、義勇軍とは満州国に開拓団として移住するともれなく一町与えられるかわりに有事には戦争に協力するという開拓移民のことを指します。故郷を離れ満州に渡った同級生達は皆帰ってきませんでした。終戦間際にソビエトが満州に攻めた時殺されたと聞いています。

【義勇軍】「満州国」の承認後、日本政府は多数の移民を日本から送り込んだ（満州移民）。最初は在郷軍人らによる満蒙開拓団に編成されて、移民するケースが多かった。また若者たちが満蒙開拓青少年義勇軍という名称で入植した。敗戦時までの満州移民の総数は27万人といわれる。（中略）1945（昭和20）年8月、ソ連が対日参戦して「満州国」は大混乱におちいり、避難の途中、ソビエト軍の攻撃・飢餓・病気などで多くの開拓民が死亡した。親を失って取り残された孤児など多くの中国残留孤児がでた。『詳説日本史研究』参照

青年学校を卒業した後、職業指導所で、藤江で軍事用の船を作る仕事に就くように指導されました。「もし断ったら徴兵するぞ」とも言われました。

19歳から20歳にかけて、「赤紙」（軍の招集令状）が届きました。始めは呉の海兵団の練兵場で訓練を受け、その後水島海軍航空隊にいたこともありました。

脱走したら殺されるという恐怖

呉の練兵所で、はっきりと覚えていることがあります。あと一週間で任期が終わるという時のことです。夜中一時頃、ラッパと笛で一斉呼び出しの合図が鳴りました。3500人はすぐさま整列をしたのですが、いくら数えても一人足りない。上等兵曹たちがくまなく探したところ、その一人は部屋で居眠りをしていたのです。その男性は顔がはれるくらい上官から棒でぼこぼこに殴られていました。居眠りをするなどもっての他だったのです。

他にも徴兵された仲間が脱走を試みましたが、竹原で憲兵（陸軍大臣に属す軍事警察。のちに権限を拡大し、国民の思想や生活をも監視するようになった『広辞苑』）にみづかり広島に連れていかれ、その後殺されたと聞いています。「お国のため、天皇のために死ぬ」という精神的な高ぶりだけではつらい軍隊生活は送れません。脱走すると軍法会議にかけられ、牢屋に入れられるか殺されました。「軍から逃れると殺される」という恐怖も同時に植え付けられていたの

です。ただ、私は軍人として生きていこうと思っていたので厳しい生活もなんとか耐えることができました。

生き運があったとしかいいようがない

二度目の徴兵先である水島ではB29の空襲に遭いました。練兵場めがけて爆弾を落としたのです。私のいる場所の目と鼻の先に、地面に30メートルほどの大きさの穴ができてびっくりしました。アメリカはどこに何があるのか分かっているかのように爆弾を落としていました。



今思っても私は本当に生き運があったと思います。私の所属した海軍の軍艦は太平洋戦争後半に数多く撃沈しました。フィリピンのレイテ沖海戦（昭和19年10月～12月）、沖縄戦（昭和20年4月～6月）ではたくさんの海軍の兵士たちが亡くなりました。特に沖縄戦では戦艦大和に乗り組んだ3000人が連合国との戦いでほとんどが亡くなりました。大和に乗っていたら私は死んでいたことでしょう。他にもあまり知られていませんが、オーストラリアやニュージーランドでもたくさんの軍艦が沈んでいます。そういう意味でも私はよく生き残れたと思います。

私は特攻隊に選ばれていませんが、中尉などの上官から特攻隊員に選ばれた者は、最後に上官と握手して出陣していました。命令に従わなければ殺されました。激突して死ねない場合、最終的には特攻隊は自決しなければなりませんでした。つらいことです。

海軍に所属したまま終戦を迎えました。8月15日の玉音放送のことを私は知らされていませんでした。日本が正式に降伏したことを知らされぬまま、呉で連合軍に抑留されていました。しかし、アメリカ軍にひどい扱いをうけたことはありません。どのくらい抑留されていたかは覚えていませんが、松永駅に到着して「ああ帰ったんだな」と感慨深く思ったのは、はっきりと覚えています。家族はとても心配していたので喜んでくれました。

日本はなぜあんなに多くの死者を出した戦争をしたのだらうと思いますが、遊びで戦場に行ったものは誰もいません。

原爆の悲惨な状況の中、「生きたい」と思った

まつおか い と
松岡伊登さん

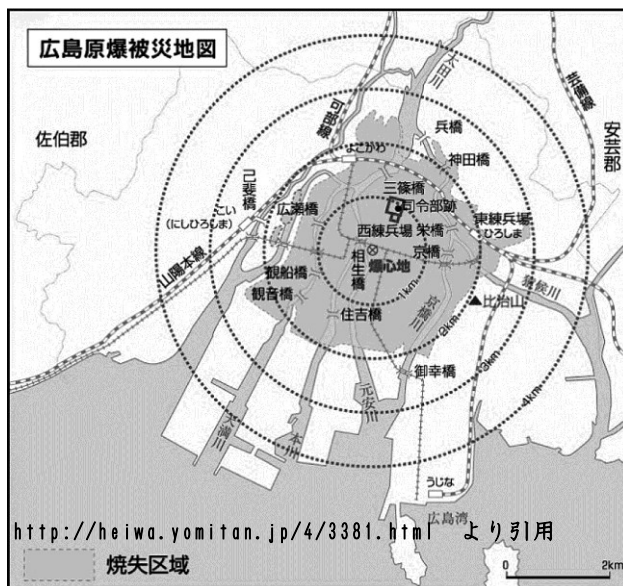
1913 大正 2 年 現在の尾道市吉和町^{よしわ}に生まれる

結婚後安芸郡府中町に移り住む

1945 昭和 20 年 32 歳 8 月 6 日 原爆投下

1951 昭和 26 年 38 歳 福山市今津町に移り住む

2006 平成 18 年 3 月 享年 94 歳



福山大空襲の 2 日前、8 月 6 日午前 8 時 15 分。広島市の中心街に世界で初めて原子爆弾が落とされました。その年の 12 月末までに 14 万人の人々が一発の原子爆弾によって命を落としたのですから、想像を絶するものがあります。

その日、松岡伊登さんは広島駅にほど近い病院で受診しているところ、原爆にあいました。その後伊登さんは家族と共に沼隈郡今津町に移り住み、蓮華寺の行事には積極的に参加して下さいました。

控えめでいつも笑顔を絶やさないやさしい方だったと記憶しています。伊登さんは平成 18 年にお亡くなりになっていますが、伊登さんの娘さんに提供していただいた体験記『福山市原爆死没者慰霊碑建立記念誌 原爆被爆体験記』からそのまま転載します。

8 月 6 日、流産して 1 週間目でした。3 歳の娘と自転車で広島市内の長谷川婦人科へ行きました。現在の人には想像も出来ないでしょう。流産しても入院する事が出来ず、バスも何時来るか分からないので自転車の 2 人乗り、3 人乗りは皆んなしていたのです。的場の病院に着いたのが 8 時でした。主人と娘は建物疎開(空襲火災による延焼を避けるため建物を壊す事)を見に行くといって段原の方へ行くのを見送って、空襲解除になっていたのを見て空を見上げていたら、「ピカッ」とし、「ボツ」という音がして黄色い花粉のようなものに囲まれ、何も

見えなくなり、宇品のレールが見えたので毒ガスにやられた、と思い、我が家に帰る方向に向かって走った。生きたい、助かりたいと走った。大正橋、宇品方面の段原の三叉路で「もや」も晴れ出して、そこに自転車を横たおしにして主人が子供を抱いていてふせていたので、私は「弘子ちゃん」といって初めて「ああ、子供がいるんだ」と気付いたのです。人間は死を思う時、何もかも忘れて生きたいと思う事がわかりました。

主人が私を見るなり、焼けたなあーというので私は何でと思い、自分を見れば服はボロボロ、医者をといても家々はマッチ箱をふみつぶしたようにペッチャンコ、電柱は折れ電線がくもの巣になり、防火用水の中には若い女の人が顔から血を流して子供を抱いて立っているのです。この世とも思えませんでした。主人が「帰ろう」というて歩き始めたら、大正橋は落ち、つぶれた家の下から「助けてえー」と、又「この下に人がいる、手伝ってくれ」とも言われたけれども「許して下さい、女と子供がけがをしています」とことわりことわり、頭を下げながら帰りました。

私は、出ていた所は全部、主人と子供は顔と手足に火傷をして、まるでお化けのようでした。2日目には福山の空襲を40度の熱の中で聞いていました。薬も無く、医者も無く、毎日主人と姑はジャガイモをすって傷口に油をぬり、布を置いてその上にイモをぬるのです。30分ほどでカラカラにかわき、後で聞いたのですが、1日に4キロもイモをすったそうです。私のゆかたが包帯代りです。間もなく子供だけは実家に預けました。

21日目に松永へ帰れるようになり、汽車も牛や馬の乗る貨車にわらを敷いて、座れるのは私のような病人だけです。その汽車も罹災者証明が入用で、本人、付き添いと面倒でした。松永駅に降りた時の空気がおいしくて、おいしくて有難かったです。

広島では毎日、来る日も来る日も死人を河原にトラックで運び、焼いていたのです。イワシの腐ったのを焼いているようなにほいです。今でもあのにほいは忘れません。

私はその後幾度も輸血しながらがんばりました。苦しんだけど皆様のおかげで、ケロイドのお手当も戴けて喜んでいきます。

今日は8月6日です。44回目の被爆記念日です。忘れられぬ事を書きました。皆様に御理解して戴けるかしらんと案じつつペンを止めます。

八月六日の誕生日プレゼント

最後に、広島市出身で、イタリア語通訳・エッセイストとして活躍している田丸公美子さんのエッセイを紹介したいと思います。前述の「建物疎開」の作業中、久子さん（田丸さんのおばにあたる）は19歳で亡くなりました。質素^{しつそけんやく}儉約をむねとした戦時中、姉に借りた、当時としてはとびきりおしゃれな靴と洋服を身につけて作業に出かけて行った久子さん。今回講談社の編集部を通して転載^{てんさい}の依頼をしたところ、田丸さんは快く承諾^{こころよ しょうだく}してくださいました。改めて、このききとり冊子が平和を願う人たちの善意^{ぜんい}で成り立っていることを感ぜずにはいられません。なお、本文中の多津子^{たつこ}さんは田丸さんのお母様です。

一九四五年八月六日、多津子は二十一歳の誕生日を迎えた。前日朝、船舶司令部の長い徹夜仕事から解放された彼女は、この日、自分の誕生日に合わせて久しぶりの休みを取ったのだ。広島では、前夜から鳴り続けた空襲警報もやみ、いつもと変わらぬ朝が始まっていた。空は真っ青に晴れわたり、蟬の合唱が睡眠不足の頭にひととき大きくこだまする。今日も暑くなりそうだ。

目覚めてすぐ、多津子は、昨夜の妹の言葉を思い出していた。むし暑さに耐え切れず、防空壕を出て川土手で涼をとっていたとき、妹の久子が声を潜めて言ったのだ。「神父さまがおっしゃたの。日本は間もなく戦争に負けるって」。軍国乙女だった多津子は、妹の言葉を遮って断定した。「神風の国、日本が戦争に負けるはずがない！変な洗脳されないでよ」。ドイツ人の神父からドイツ語を習い、油絵やピアノもたしなむ妹は、いつまでもお嬢さん気分が抜けない。先日も夕方、教会のコンサートに出かけ、男子生徒に送られて帰宅した。お国のために働いている多津子は、無自覚な妹に少し苛立っていた。

普段着でくつろぐ多津子に久子が声をかけた。

「お誕生日おめでとう。帰ったら、私がバラ寿司作ってあげるからね」

前日、母親が遠い庄原にある実家から一斗もの闇米をかついで帰宅していたので、今日は久しぶりに白米が炊けるのだ。料理上手で優しい妹は、長旅で疲れた母親の代りに、町内の建物疎開作業に出かけるところだった。珍しく太っ腹になった多津子は、詭えて間もない紺のジャケットと茶色の革靴を差し出した。「今日はこれを着ていけば」

甲革に花模様のカットアウトが施された革靴は、めったに手に入らない出物で、行列してやっと手に入れたものだ。自分でも数えるほどしか履いていない宝物を、妹が無断で着用してコンサートに出かけたことがあり、それをなじって喧嘩になったのに、なぜその日に限って自分から貸したのか今もわからない。

当時は、濃色の長袖と動きやすいもんぺが女性の制服のようになっていた。地味なもんぺ姿が、靴とジャケットでおしゃれに変身したことが、よほど嬉しかったのだろう。久子はしばし足元を見つめ、モデルのようにくるりと一回転

すると、軽やかな足取りで集合場所へと向かって行った。漆黒の髪、ぽっちゃりした唇、彫りの深い顔につぶらな瞳、その日の久子は、いつもにまして美しく見えた。

八時十五分、皿を洗う多津子の目の前が突然光輝くオレンジ色に染まった。閃光のあと、彼女の記憶は途切れた。爆心地からわずか九〇〇メートル、秒速四四〇メートルもの爆風は、木造の歯科医院兼住宅を、多津子を巻き込み瞬時に倒壊させたのだった。不幸中の幸いは、家が後方に倒れたため、勝手口にいた母親が無傷で中庭に押し出されたことだ。彼女は、瓦礫の下から、頭に無数のガラス片の直撃を受けた夫を助け出し、続いて多津子を探した。

その頃、意識が戻った多津子は、のんびりした性格ゆえパニックにもならず、ゆっくりと考えを巡らしていた。

「どうやら、焼夷弾がわが家を直撃したようだ。さて、これからどうするべきか」。それが史上初の原子爆弾だとは、まだ知るよしもなかった。ふいに、自分の名を呼ぶ声が耳に入った。彼女は身体をよじらせ、必死で腕を突き上げた。指の先がかろうじて外に出た。瓦礫の間から一瞬見えた空は、さっきまでの青色を失い、すっかり夜の闇色に染まっている。「お母さん、ここ、ここ、指が三本出たよ!」。外に引き出されたとき、火はすぐそばまで迫っていた。

髪を逆立てた裸体の人たちが、こぞって川の方角に逃げている。川土手にはすでに被災者が溢れていた。灰色の空がさらに暗さを増し、黒い雨が降り始めた。急いで橋の下に避難する。入りきれない人や動けない人は、放射能が濃縮された雨に濡れるしかなかった。

もはや、川土手は地獄絵図そのもの。真赤に焼け爛れた人たちは、いずれも全裸で、手の先からは溶けた皮膚が長くぶらさがっている。目が溶け顔も崩れた若い女学生が、リンパで巨大に腫れ上がった性器を人目にさらし、まっばだかで横たわっている。わずかに膨らんだ胸元でかろうじて女性であることが分かる。生きていることが不思議な状態で、「おかあさん」と息も絶え絶えに繰り返す。

背中から骨が出た状態で幽鬼のように歩く人。蟬の声も鳥のさえずりもすっかり絶えた不気味な静けさのなかで、「水」「おかあさん」「死なせて・・・」といううめき声だけが、通奏低音のように地から立ちあがってくる。火傷した人に水をあげるのは厳禁と言われていたため、みな、末期の水ももらえず死んでいった。多津子は、喉の渇きに耐え切れず川の水をすくって飲んだ。「水」「水」という声がこだまし、悪いことをしているような気になる。

見つからなかった妹

灰色の雲に覆われた空と、紅蓮の炎が舞い踊る街。あの下で一体幾人の人たちが生きたまま焼かれているのだろう。

多津子は母親と地面に横たわって夜を明かした。翌朝、地を這ううめき声の合唱はすっかり止んでいた。声なき死体が累々と土手を埋め尽くしている。一万度の熱を持つ人造の太陽が出現した空に、普段の太陽が戻り、夏の日差しが被災者の上に容赦なく照りつけた。

土手にわずかに栽培されていたかぼちゃとトマトを見つけ、そのままかじりつく。小さな硬いかぼちゃと青いトマト。二十四時間ぶりにゆっくりと喉を通る食べ物を感じたとき、初めて「生きている」実感が湧き上がってきた。

その頃、市内の各所には炊き出し拠点が開設されていた。炎天下、一時間も並んで手にしたのは乾パンの缶。隣りにいた人の手に載っているのは白米のおむすび。多津子は地団駄を踏んだ。「まったく、私はいつもくじ運が悪い！」史上最初の原爆に出会う不運より、おむすびがもらえなかった不運を嘆く。人間とは実にたくましい。

家があった場所へ帰るため橋を渡る。目に入ったのは、川面を埋め尽くして流れる無数の死体だ。干潮から満潮に変わったため、岸に倒れていた人たちも呑みこんだのだろう、すさまじい数だ。ふやけて風船のように膨らんだ白い死体、土色の死体、剥き出しの血管が水で凝固し、全身仁王さまのように真赤な死体、虚空をつかむ腕を水面高く突き上げて流れる死体。それぞれの断末魔の瞬間を形に残した亡骸が、上流から切れ目なく流れきて、たゆたい、押し合いながら海へと運ばれて行く。麻痺した心は、もう何も感じない。

焦土と化した自宅を見ても、心は固まったままだ。胸が締め付けられ、突如感情が戻ってきたのは、防空壕に避難させていた大量の本が灰になっているのを見たときだ。頁に薄く字の跡が残る本をそっと手に取るとばらばらと空に舞い散った。涙がとめどなく溢れ出した。本の虫だった彼女にとっては、家が焼けたことより辛い。

ふいに強い不安に襲われた。中には、主婦之友社の「花嫁さん全集十二巻」があったのだ。八人兄妹なのに、多津子はまったく家の手伝いをしなかった。おむすびひとつ作ったことがないが、あの虎の巻さえあれば何でもできる。そう高をくくっていた。「あの本がないと結婚できない」。こんな異常事態になんどのんきなことを考えているのか。我に返った多津子は自分を笑った。

そばの母親は、缶の中で真っ黒に炭化した米を呆然と見つめている。育ち盛りの子供たちを喜ばせたい一心で、一斗もの米を人目を避けて担いで帰ったというのに、誰の口に入れてやることもできなかった。

その後、多津子は妹を探して市内の救護所を二日間歩き回った。救護所といっても、性別も生死も定かではない人たちが地面に寝かされているだけだ。どんな顔になっていても妹なら絶対わかる。そう信じて探したのだがとうとう見つからなかった。建物疎開作業は、爆心地から数メートルの戸外だった。妹は瞬時に蒸発したに違いない。多津子は、妹が自分の一張羅の服を着たまま、苦しまずにしんだと思うことで、なんとか心のバランスを保っていた。

救護所では、裂傷や火傷で無残な顔になった若い女性たちで溢れていた。本が焼けたくらいで結婚できないと気に病んだ自分が恥ずかしい。家事が得意な優しい妹が十九歳で死に、勉強ばかりして役立たずの自分が生き残った。今度は、申しわけなさに身がすくんだ。

結局、父母と八人の子供たちの中で、原爆で死んだのは次女の久子だけだった。東京の大学にいた長男は不在、郊外の兵器工場に学徒動員されていた二男と三男、田舎に疎開していた小学生の妹二人は無事だった。十二歳だった四男は、第一中学の一年生三〇五人中、十八人の生き残りの一人だ。全身、口の中までガラスの破片だらけという重傷で、半年、生死の境をさまよった末、奇跡的に命を長らえた。

田丸公美子著『シモネッタのどこまでいっても男と女』講談社 より一部転載

【建物疎開】建物疎開とは、空襲により火災が周辺に広がるのを防ぐために、あらかじめ建物を取り壊して、防火地帯を作ること。広島動員学徒原爆死亡7200人のうち、82%が建物疎開作業をしていました。広島市 HP より引用

【原爆投下による死者数】

被爆当時、広島には約 35 万人の市民や軍人がいたと考えられています。これは、住民、軍関係者、建物疎開作業に動員された周辺町村からの人々などを合わせた数字です。当時日本の植民地だった朝鮮、台湾や、中国大陸からの人々が含まれ、その中には強制的に徴用された人々もいました。また、少数の、中国や東南アジアからの留学生や、アメリカ軍捕虜などの外国人も、含まれていました。原爆によって死亡した人の数については、現在も正確にはつかめていません。しかし、放射線による急性障害が一応おさまった、昭和 20 年（1945 年）12 月末までに、約 14 万人が死亡したと推計されています。

爆心地から 1.2 キロメートルでは、その日のうちにほぼ 50%が死亡しました。それよりも爆心地に近い地域では 80～100%が死亡したと推定されています。また、即死あるいは即日死をまぬがれた人でも、近距離で被爆し、傷害の重い人ほど、その後の死亡率が高かったようです。

広島市 HP より引用

おわりに

この夏公開された、映画「野火（のび）」を見ました。実際にフィリピン戦に従軍した大岡昇平^{おおおかしょうへい}氏の原作映画です。歴史教科書には「日本軍、フィリピンレイテ沖戦で大敗^{たいはい}」と小さく記されているだけですが、その実情とは、ゴミのように散らばっている死体、極度の飢え、疑心暗鬼^{ぎしんあんき}による殺戮、人として犯してはならない行為の数々です。映画は、兵士^{きょうき}たちが人間性を失っていく過程を、まざまざと映し出していました。その狂気は私たちの中にもひそんでいて、できれば見るのを避^{たぐい}けたい類のものですが、監督の塚本氏は「映画は一つの結論にもっていくものではありませんが、(中略)こんな恐ろしいこと（戦争）に近づくのは絶対にいやだという大前提は感じて頂きたい」と、映画作成の動機を語っています。

あの戦争は何だったのでしょうか？私にはまだ答えは出せていません。むしろ、このききとりを通して、やっとスタート地点に立てた、というのが本当のところです。

ただ、僧侶として、戦争で亡くなった方々や辛い時代を生きた方々の生きざまに耳を傾け、たとえ小さな祈りだとしても、その魂が安らかであることを祈ることはできるのではないか、と思うに至っています。

ききとりは、語ってくださる方がいる限り、今後とも続けるつもりです。

最後に、「平和への祈り」の開催は住職・総代・役員の皆様によって承認され、支援を仰ぐことができました。また、この冊子の印刷代は、檀信徒さんが蓮華寺に納めてくださった浄財によってまかない、無料配布が実現しました。

校正はききとりに協力していただいた方々に再度読んでいただき、誤りを直していただきました。戦時中の貨幣価値に関しては経済記者である山崎良兵さんにアドバイスをいただき、また、校正や構成に関して、勉強仲間の玉置真依さん、母、夫から助言を得ました。通訳者・エッセイストの田丸公美子さんには快く転載許可をしてくださいました。

お世話になったすべての方々に改めてお礼申し上げます。

合掌

「戦後七十年 平和への祈り

松永地域在住の方からの

戦争体験ききとり冊子」

発行者 真言宗 蓮華寺

福山市今津町七七五

〇八四(九三三三三三三三

印刷者 松永印刷有限公司

平成二十七年八月発行

非売品